国際医療福祉大学　2012年11月30日発行　学校法人国際医療福祉大学　☎0287-24-3000
http://www.iuhw.ac.jp/

「共に生きる社会」の実現をめざして

IUHW

vol. 91
November
2012

International University of Health and Welfare

第17回 風花祭
大田原キャンパス

第2回 国際医療福祉大学学会学術大会
海外保健福祉事情

Special edition 1 KAZAHANASAI

特集1 風花祭

大田原キャンパス

October 13～14 2012

第17回 風花祭（かざはなさい）

実行委員長は
理学療法学科2年の
鈴木光さん

今年のテーマは

「Unity ～繋がれIUHW～」

ひとりひとりが個々の存在を認め合い、いかなる場面においても
人と人とのつながりを大切にしたいという気持ちが込められています。
今年は晴天に恵まれた2日間になりました。（大田原キャンパス広報室　金井雅之）

第1回ベストカップルコンテスト

観客席には意外に保護者が目立ちました。優勝賞品は東京ディズニーランドペアチケット

こちらは編集者が勝手に選んだ仲良しショットです

同時開催のオープンキャンパス

●医療福祉・マネジメント学科は学生がホンネを語るトークライブを実施

おまけ① 出たがり屋さん

おまけ② 他人のそら似

ストリートスナップ

●よくできた立体看板。だんごは巻いた包帯です

●値段を書き直している姿が笑いを誘う

被災地支援も継続

「忘れないで3・11」
バイオリンで被災地支援の
継続を呼びかける

被災地の宮城県岩沼市との交流も2年目。
今年も岩沼産の野菜を販売し、
利益と募金を合わせて
63,081円をお届けすることができた

介助犬も初参加

介助犬の紹介コーナーでは、
バスボム（入浴剤）やポストカードの販売も。
じんた（オス・4歳）はだいぶリラックス

特別講演会を同時開催

13日

教育後援会「第15回会員のつどい」において、矢﨑義雄総長が『みんなで育む医療－チーム医療の役割』と題して記念講演を行った。

14日

パラリンピック競泳の金メダリスト河合純一氏による特別講演会『夢への努力は今しかない』が開催された。

特集2 秋のイベント

「社会に開かれた大学」を基本理念のひとつとし、さらに、「専門性」「学際性」などを教育理念に掲げる本学ならではの取り組みとして、この秋に大田原キャンパスで開催された三つのイベントを紹介します。いずれも二回、三回と回を重ねており、今後のさらなる発展が期待されています。

第二回 国際医療福祉大学学会学術大会

九月一日、二日の二日間、大田原キャンパスにて、「第二回国際医療福祉大学学会学術大会」（大会長：蘇原泰則国際医療福祉大学病院病院長）が開催された。今回のテーマは**『超高齢社会において医療・福祉にもとめられるもの』**

大田原キャンパスの教員一七一名をはじめ、関連施設からも約一〇〇名の教職員が参加し、二日間で総勢二三七名が、演題発表または参加する盛況な大会となった。

●挨拶に立つ蘇原泰則大会長

一日目は、矢﨑義雄総長による特別講演「これからの医学・医療―超高齢社会への挑戦と応戦―」、ポスターセッション、本学附属の四病院長によるシンポジウムⅠ「超高齢社会における医療の問題点」が開かれた。

●附属4病院長によるシンポジウムI

●活気のあったポスターセッション会場

●矢﨑義雄総長の特別講演

二日目は、口述発表、学科特別企画のほか、附属病院・施設のスタッフによる特別企画「災害時の高齢者医療について」、同じくリハビリテーションスタッフによるシンポジウムⅡ「超高齢社会におけるリハビリテーションの問題点」、がんプロフェッショナル養成基盤推進プランに基づくシンポジウムⅢ「超高齢社会におけるがんチーム医療の在り方」が開かれ、盛会のうちに幕を閉じた。（学会事務局）

●リハビリテーションスタッフによるシンポジウムII

●外部のシンポジストを含めてのシンポジウムIII

第三回 キッズスクール

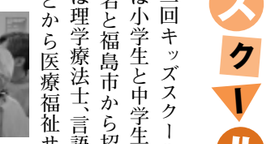
八月二五日、「第三回キッズスクール」を開催した。参加者は小学生と中学生で、一般申し込みの八九名と福島市から招待した一二名。小学生は理学療法士、言語聴覚士、視能訓練士などから医療福祉サービスを受ける側として、中学生は看護師、診療放射線技師、作業療法士、薬剤師など医療福祉に従事する側としてイベントを体験した。

アンケートで「体験してよかった・体験してみたかった」ものの一位と二位は、小学生は内視鏡手術の模擬体験ができる「手術シミュレータ」、理学療法学科の「からだの反射を体験しよう！」、中学生は「薬剤師の仕事にチャレンジ」、「手術シミュレータ」。

なりたい職業は、小学生は「薬剤師」、「教師」がトップで、次いで「医師」。中学生は「薬剤師」がトップで、次いで「看護師」、「医師」と続き、医療福祉関係職が多数を占めた。

ネットトヨタ栃木からもご協力をいただき、参加者からは「年に数回開催してほしい」、「もっと参加人数を増やしてほしい」との声が聞かれた。

（総務課長　川上二郎）


●モデル人形を使いフィジカルアセスメントを体験する中学生

●中学生コースの「指の装具を作ろう!」

●小学生コースの「白内障・緑内障体験」

第二回 幸齢者スクール

九月一七日の敬老の日に、アクティブ・シニアを対象に大田原市との共催で、「第二回幸齢者（こうれいしゃ）スクール」を開催した。

午前の部は、津久井富雄大田原市長、北島政樹本学学長のご挨拶に続き、関節痛、脳卒中、心不全、排尿障害をテーマに第一線で活躍する本学の四名の医師による医療講演会を開催。二三二名の市民の方々にお集まりいただき、さまざまな質問が寄せられた。

ネットトヨタ栃木の協賛による福祉車両の展示試乗会をはさんで、午後の体験学習には四〇～八〇代までの五〇名が参加。いきいき体操、筋力とバランスの体力測定、デザインパズル、聞こえや骨密度の測定、画面の一部が変化する「間違い探し」など、八つのプログラムをゲーム感覚で楽しみながら、若さと健康度をチェックした。

（視機能療法学科長　新井田孝裕）

●手元の見え方と眼底検査であなたの若さをチェック

●最後に北島学長から健康カルテと修了証を受け取る参加者

●頭と身体を使ってデザインパズルに挑戦!

IUHW International University of Health and Welfare
vol.91 November 2012

CONTENTS

2.3 特集1 第17回 風花祭 大田原キャンパス

4 特集2 第2回 国際医療福祉大学学会学術大会
5 特集2 第3回 キッズスクール 第2回 幸齢者スクール
6.9 特集3 海外保健福祉事情 中国・台湾・ベトナム・タイ・オーストラリア・韓国

キャンパスレポート
10 第24回 小田原キャンパス／第14回 福岡天神キャンパス
11 第28回 大川キャンパス／第6回 塩谷看護専門学校

トピックス
12 開原成允先生 記念シンポジウム開催のご報告
13 同窓会「マロニエ会」新代表幹事・副代表幹事決定／岩尾總一郎・前副学長が㈳日本尊厳死協会の6代目理事長に就任／第25回教育研究大会・教員研修会 盛会に終わる
14 新宿けやき園 新宿区長が「100歳以上の入所者のお祝いの会」を訪問／北島政樹学長が合同国際会議で講演／「リレー・フォー・ライフ とちぎ2012 in 宇都宮」に参加／NS 平成24年度 Win-Win-Win
15 ORT 第12回 国際視能矯正学会 in トロント／大学院福祉援助工学分野 大田原で合宿・発表会／SHMシンポジウム「多職種連携の質的向上の可能性について」の開催／SHM「経営系3年次実習報告会」「第16回医療経営戦略セミナー」

施設インフォメーション
16 山王病院／国際医療福祉大学塩谷病院／国際医療福祉大学病院
17 国際医療福祉大学三田病院／国際医療福祉大学熱海病院 化学療法研究所附属病院

18 卒業生・留学生通信
19 大学院・医療福祉ｅチャンネル
20 学生投稿ページ

学位記授与式（卒業式）・入学式のご案内

平成24年度 学部並びに大学院学位記授与式
- ●大田原キャンパス（那須アスリーナ1階）平成25年3月14日（木）10:20～
- ●小田原キャンパス（6階体育館）平成25年3月15日（金）10:20～
- ●福岡天神キャンパス（9階講堂）平成25年3月12日（火）11:00～
- ●大川キャンパス（図書館・講堂棟3階）平成25年3月11日（月）14:00～

平成24年度 卒業式
- ●塩谷看護専門学校（講堂）平成25年3月5日（火）10:00～

平成25年度 学部並びに大学院入学式
- ●大田原キャンパス（那須アスリーナ1階）平成25年4月2日（火）10:20～
- ●小田原キャンパス（6階体育館）平成25年4月3日（水）10:40～
- ●福岡キャンパス・大川キャンパス（図書館・講堂棟3階）平成25年4月6日（土）11:00～（大川キャンパスで合同開催）

平成25年度 入学式
- ●塩谷看護専門学校（講堂）平成25年4月8日（月）10:00～

海外保健福祉事情

本学の基本理念のひとつが「国際性を目指した大学」であり、これは

国際的センスを備え、いかなる国の人々とも伸び伸びと協働できる真の国際人を育成すること。

これを実現するための活動が「海外保健福祉事情」という海外研修である。夏休みや冬休みを利用し、現地の医療スタッフの指導のもと、患者さんのケアの補助やスタッフのお手伝いなど直接医療福祉の現場に触れることはもちろん、言葉を含む相互の文化交流などの体験ができる。

ボランティア活動から始まった本活動も、現在では総合教育科目となり、大学として充実したサポートを行っている。

●風花祭でも研修の成果をパネル展示した

中国 中国リハビリテーション研究センター

異文化に触れて自分たちを見つける

小田原保健医療学部
理学療法学科学科長　谷浩明

学生二二名（大田原三、小田原五、大川一四）が八月七日から二週間、北京の中国リハビリテーション研究センターで研修を行った。理学療法・作業療法グループと薬学グループに分かれての座学・見学・体験には、針治療と漢方薬抽出など中国特有の内容もあった。万里の長城の見学など中国文化に触れ、独立行政法人国際協力機構の北京事務所で日本の対中国支援の話を伺う機会に恵まれた。

医療福祉分野のみならず、町の喧噪などのすべての場面での異文化体験が学生にとって「日本」を再認識する良い機会となった。拙い英語や片言の中国語、身振りを使って必死にコミュニケーションをとりながら「**国際社会の中で自分らしく生きるにはどうしたらよいのか**」を問う二週間であったように思う。

とりわけ私が嬉しかったのは学生の高い適応力だった。センターのスタッフをはじめ研修を支えてくださった皆様に深謝する。

●スタッフの説明を受ける学生

今後に活かしたい経験の連続

小田原保健医療学部
理学療法学科二年　山口ゆい

学科別に実習を行った。作業療法と理学療法はそれぞれの部屋で、多くの療法士と患者さんがいて活気溢れる雰囲気の中で行われていた。患者さんのご家族も参加していて驚いた。脳性麻痺、脳血管障害、脊髄損傷の患者さんの理学療法を見学することもできた。さらに温馨家園（地域リハビリ施設のひとつ）を見学する機会もあって、中国のリハビリの状況などを十分に理解できた。

国際協力機構北京事務所を訪問し、中国に対する援助について説明を受ける貴重な機会もあった。万里の長城を見学し、京劇・雑技を鑑賞した。中国の歴史や文化を肌で感じる時間もあった。今回得たさまざまな経験を一生忘れることなく、今後の生活や理学療法での仕事の中で活かしていきたいと思う。研修に関わったすべての方々に感謝するとともに、出会った中国の方々とこれからも良い関係を持ち続けられることを願ってやまない。

●Japan Dayのひとつコマ

台湾 元培（げんぱい）科技大学

人々の温かさに感謝——いつかまたいってみたい

福岡看護学部
看護学科教授　今村桃子

八月七日から一四日間、台湾のシリコンバレーと言われる新竹市にある元培科技大学での研修は、学生の主体的な活動で無事に終了することができた。ボランティア学生と寮で衣食住を共にし、竹細工作りや太極拳、食文化ではお茶、ビーフン・肉団子スープの調理実習など熱心に取り組んだ。また、新竹市政府の訪問や故宮博物館、夕日の綺麗な淡水河の見学、士林夜市でのショッピングは大いに見聞を広めた。

一方、台湾の医療レベルはかなり高く、平均在院日数は六～九日と短い。ひとつの病院では、ヘルスプロモーションの促進を重視し、レストラン、トレーニングセンターなどの整備が行われていた。学生は台湾の医療福祉の現状を垣間見、各自の課題発見に繋げたようだ。

台湾は親日的であり、日本に近い状況にある。今後は学生、教員ともに学際的な交流を深め飛躍していきたいと思う。

●故宮博物館にて

台湾の病院の特徴を知った

保健医療学部
作業療法学科二年　瀬川菜苗

学内の学生寮で台湾の学生と共に過ごし、大学や訪問先の医療スタッフのおかげで様々なことを学ぶことができた。

講義では中国語と台湾の文化を学び、病院訪問では、壢新病院や新竹病院などを見学した。リハビリ室には、日本と同じような器材が多くあったが、付き添いの家族が多くいたことや、患者さん個人が自主的にリハビリを行う状況が印象に残った。病院には、美術館や、食材にこだわったレストランなども設けられていた。さらに、看護師が電話で健康相談に応じる体制がとられていたり、英語や日本語、中国語といった他国語を話すスタッフがいたりと、台湾の病院の様々な特徴を知ることができた。最終日のJapan Dayでは日本のゲームを教えたり、日本の料理を作ったりして感謝の気持ちを伝えた。

台湾の医療現場の様子を知り、台湾や福岡天神キャンパスの学生とも友人になることができ意義のある研修となった。

●台湾の伝統茶の授業

ベトナム チョーライ病院

卒業生の活躍を目の当たりに

保健医療学部
言語聴覚学科准教授　柴本勇

一六回目を迎えるホーチミン市の国立チョーライ病院での研修に学生二四名（大田原六、小田原一、福岡天神一七）が参加した。初日の交流夕食会は複数のキャンパスから参加する学生たちが、初対面の仲間と打ち解けられるようにとの配慮である。

翌日から四グループに分かれ見学や体験、座学を通して集団リハビリテーション訓練、上肢機能回復訓練、バイタルサイン、消毒、調剤等、具体的な医療活動を学ぶ充実した研修が行われた。独立行政法人国際協力機構の方の話をうかがったり、在ホーチミン総領事館で総領事や副領事と懇談したりする貴重な機会もあった。

さらに、平和村や戦争証跡博物館等を通じてベトナム戦争について学ぶ機会もあった。研修中出会った人々、特に本学卒業生の林由美子さん（OT学科一期生）の活躍を目の当たりにして、海外での医療活動参加という新たな選択肢を見いだした学生がいたのは望外の喜びである。

●麻痺しているの足の動かし方を教わる

海外で活動したという思いが形になった

保健医療学部
言語聴覚学科二年　中島恵

私は国際的に活躍できる医療人になりたい。その能力を涵養するためにこの研修に参加した。病棟や薬剤部などでバイタルサイン取りや調剤などをした。どれも私にとって初経験だった。しかし、親切丁寧に教えていただいたお陰で実際に行なってみる勇気が湧いた。ベトナム語がわからないので、必死になって意思疎通を図り、うまくいった時は、やればできるという達成感があった。

また、郊外のクチにあるトンネルや戦争証跡博物館を訪問する機会があり、ベトナム戦争の凄惨な現実を実感した。青年海外協力隊員から海外で活動するおもしろさと難しさをうかがう貴重な機会もあった。こうして私の中の海外で活躍したいという漫然とした思いは、より具体的なものになった。これこそが私がベトナムで学んだ最も大切なことである。本研修の機会をくれた両親と研修を支える教職員並びに現地スタッフの皆様に深謝する。

●今年、ベトナム初の言語聴覚士が誕生した（奥）

特集3 海外保健福祉事情 タイ・オーストラリア

タイ

クリスチャン大学

タイの衛生事情を把握

保健医療学部
看護学科講師　大野明美

八月七日から二週間、大田原キャパスの六人の学生を率いてタイのクリスチャン大学（CUT）で研修を行った。引率教員として最も心を砕いたのは、（お叱りを頂戴するかもしれないが）研修内容ではなく実は参加学生の健康管理だった。タイでの海外研修はこれが初回で、経験者がいなかったせいもあって天気と食事をひどく心配しながら出かけた。

意外にも熱帯サバナ気候のバンコクは実に快適だった。陽射しは強いが毎夕の大雨のお陰で朝晩は涼しく過ごしやすかった。下痢・腹痛で寝込むものはいなかった。それどころかタイ料理（肉や魚、野菜がふんだんに使用された何種類もの料理）と様々な南国果実のお陰で全員が太ったくらいだ。万全の体調でタイの文化、医療事情について多くを学べた。ひとえに毎日早朝から夜遅くまで常に同行してくださったCUTの教職員の皆様のおかげである。心より感謝申しあげたい。

●研修初日の歓迎セレモニー

タイでの異文化体験

保健医療学部
看護学科二年　滝田結

タイの人たちと交流するためにはタイの文化を理解することが大切だ。それは、我が日本のことをよく理解することにほかならない。本だけではなく実体験を通して諒解するのが肝心、「百聞は一見にしかず」だ。例えば、タイ国民が国王を敬愛してやまないことを体験した。どこの通りも道路脇には国王や王妃の肖像画や像が置かれていた。見学した病院の壁に、若かりし頃の国王の写真が飾ってあり、どの看護師の胸にも国王の肖像画のバッジがあった。対照的に、私たちが天皇について様々な質問を受けた時には、満足に答えることができなかった。タイの国王と日本の天皇とは必ずしも同じ存在ではないものの、王族に関するタイ人と日本人の考え方の大きな相違を実感した。病気や健康の捉え方、看護や介護の方法を理解するにしても、タイ人が、あるいは日本人が、何を大切にして生活しているかを知ることが重要だと実感した。

●ラマ６世がホアヒンに建てた宮殿

オーストラリア

TAFE・ホームステイ

オーストラリアの保健福祉事情

小田原保健医療学部
作業療法学科学科長　菅原洋子

研修は八月と九月に二週間ずつ実施された。ホームステイ、英語学習、医療福祉の座学と施設見学、オーストラリア文化・自然の見聞からなり、濃密であった。

現場の医療専門職者や地域の人の話を聞けるので大変に良い勉強になった。前者は例えば、わが国と共通する看護師不足に対する意見だ。准看護師を増員すべきという准看護師専門校教師、一方、上質のケアの為には大卒の正看護師を増員すべきという病院看護師、このような立場による対照的な意見は日本にいてはなかなか得られない。後者は例えば、訪問した豪華な介護老人施設で入所者や職員の方々と話をしたこと。さらに、この施設ではジャパン・デーを行って日本の文化を伝え交流を図った。半被姿の学生がソーラン節を披露したり、折り紙や福笑いなどを入所者と共に楽しんだりした。このような充実した研修を支えてくださった方々に心より感謝する。

●緊急搬送ヘリコプター。30年にわたって人命を救ってきた。

オーストラリアでの研修を終えて

福岡看護学部
看護学科三年　山中志穂

州立校TAFEでの語学研修や医療・介護施設見学、ホームステイでの学びは、私にとって貴重な体験となった。

他国の学生と一緒の英語学習は、とてもフレンドリーで、国際交流の場でもあったと思う。介護施設見学では日本との違いに驚いた。Sandbrook老人ホームがとても豪華だったが、オーストラリアではこれが普通だという。入所時に払われた保証金は銀行に預けられ、その利子で施設が運営され、退所時に保証金はそのまま返金されるシステムだ。ホームステイでは、ゆっくり話してくれたが理解できず返事に困った。少しずつ慣れ、ある程度理解できるようになったが、自分の思いを伝えるのは難しかった。

これらの経験から、アメリカなどの医療制度も学びたいと思うようになった。将来は語学留学をして日常会話ができるようになり、今回お世話になった方々と英語で話してみたい。

●Sandbrook 老人ホームで入居者の方と

特集3 海外保健福祉事情 韓国

韓国

仁済（インジェ）大学

学生による研修プログラム

福岡リハビリテーション学部
作業療法学科講師　石橋英恵

初日の歓迎式だけはインジェ大学の教職員主導で行われたが、その後の全ての研修プログラム―キャンパスツアー・韓国語教室・日韓文化交流・インジェ大学と当学部教員による講義・施設訪問・学生交流（K-POPコンテスト）―は学生有志によって準備・進行されていた。

当初、学生たちはインジェ大学の学生たちとのコミュニケーションに戸惑う姿も見られたが、日を重ねるにつれ「気持ち」を伝える手段は言葉だけではないことを体験していった。また、少し異なる文化に触れ、改めて自分たちの文化と生活を見つめ直す機会にもなったようだ。

一日の研修が終わった後はインジェ大学の学生とサッカーを楽しんだり、大学周辺を案内してもらったりする姿が見られ、最終日には連絡先の交換も行われていた。今回経験した韓国の学生たちとの個人的な交流と友情を絶やすことなく育てていってほしいと切に願う。

●釜山市障害者福祉館を見学

自分を見つめ直すきっかけに

福岡リハビリテーション学部
作業療法学科二年　齋藤未桂

インジェ大学の研修で、学生交流や講義、病院・施設見学、文化見聞などの経験ができた。中でも講義と作業療法実習室見学が印象深かった。

講義では、韓国の作業療法の歴史を学び、日本と韓国の作業療法の成り立ちの違いについて考えることができた。国の歴史を学ぶことは、その国の考え方の理解につながると思った。そして、それは日本の作業療法を振り返って理解し学ぶための貴重な機会でもあった。作業療法実習室は、私たちの大学に比べ少し狭く器材は古かった。自分が恵まれた環境で学んでいることを実感する一方、われわれに勝るとも劣らない韓国の学生と先生方の意欲・志を見習いたいと思った。

熱心に講義してくださった先生方、親切にお世話してくださった学生さんたちへの感謝の気持ちを忘れず、柔軟な考えと行動力のある作業療法士になれるよう頑張りたい。

●伝統衣装と伝統遊びを体験

韓国

建陽（コニャン）大学

グローバルかつローカルな視点で捉える

福岡看護学部
看護学科教授　尹玉鐘

学生たちは最初は緊張していたようだが、次第に周囲の環境にも適応していった。研修はPT・OT・ST・NS共同プログラムが二日、学科別プログラムが五日等の日程だった。学科別では、基礎看護実習CPR（心肺蘇生法）、ガウニングの演習を現地学生とともにコミュニケーションをとりながら行い、技術、知識を得るよい機会となった。

●ビビンバごちそうさまでした

また、韓国の産後調理院を見学し、日本にはない産後ケアの文化を学ぶことができた。そのほか、国軍看護士官学校、国会議事堂、梨花（イファ）女子大学等を見学した。見学の際には事前学習の上、積極的な学習の雰囲気を作ることができたと思う。

二週間の研修を通して学生たちは看護の現状をグローバルかつローカルな視点で捉え、国際的に貢献できる能力を育むという部分を体得できたのではないだろうか。

いつか同じ現場で仕事ができる日を

福岡リハビリテーション学部
理学療法学科二年　甲斐江美

二週間の研修は韓国の文化に触れ、医療福祉を実体験する貴重な機会だった。韓国と日本は距離の近い国である。しかし、文化や医療において異なる所があった。また、韓国の最先端の医療を見学することもできとても光栄だった。たとえば、建陽大学病院を見学した際に、アジアで最初に導入された癌治療機器であるサイバーナイフを見学した。特殊な放射線治療で、週何回かの治療で癌が完治する画期的な機器で興味深かった。

韓国の伝統的な衣装であるチマチョゴリを着る文化体験もできた。私たちは建陽大学の先生方・生徒たちに温かく迎えられ、とても充実した二週間を送ることができた。建陽大学の学生に大学周辺の街を案内してもらったり、一緒にご飯を食べたりして交流を深めた。最終日にはお互いに別れを惜しんだ。いつか建陽大学の生徒と同じ現場で仕事ができる日を願い、さらに勉学に励みたい。

●チマチョゴリ体験

第24回

Odawara

小田原キャンパスレポート

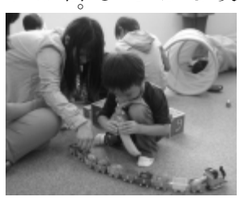
第七回 潮風祭 飛躍～ジャンピン～

一〇月一三日(土)、一四日(日)、第七回潮風祭が開催された。テーマは『飛躍～ジャンピン～』。一人ひとりが個性を存分に発揮し、仲間と助け合いながら成功という一つの目標に向かい全員で作り上げることで、大人として人間としてさらなる飛躍を遂げようというもの。

また、今年は実行委員が「小さなお子さんがいるお母さんにも楽しんで欲しい」と「ちびっこ広場」を企画。一日目には本校の「おたびよサポートチーム」の教員による親子体操や絵本の読み聞かせが実施され、来場者の好評を得た。恒例のビンゴ大会では、今年も参加料を全額東日本大震災の義援金として寄付することになった。

また、同日には教育後援会会員のつどいの特別講演も開催され、サッカー解説者宮澤ミシェルさんによる『求められるチーム力』に参加者は興味深く聞き入った。

●チーム力について語る宮澤ミシェルさん



●新企画のちびっこ広場

学科の体験ブースでは、看護学科は血圧・身長・体重測定などを含めた健康診断を実施、理学療法学科は「転ばぬ先のストレッチ」と題して来場者にストレッチを実施、作業療法学科は作業療法士の仕事を身近に感じてもらおうと革細工の作成コーナーを設置した。また屋台出店やステージ企画は、潮風祭を存分に楽しみたいという熱気に溢れていた。一般公開終了後の後夜祭で恒例になった学科ムービーの完成度は目を見張るものがあった。

最後に、実行委員長を務めた飯塚直輝さんから、「今年は次に続く後輩を育てたいと思い一年生にいろいろな課題を与えながら準備した。二年生はもちろん、一年生がとても良く動いてくれた。来年は今年以上の潮風祭にしてくれることを期待しています！」と感謝と期待の気持ちが述べられた。工夫し苦労しながら一、二年生全員で作り上げた達成感で学生たちは大きな『飛躍』を遂げていた。

●来年に期待が膨らむ飛躍の年になった

（学務課　佐藤浩子）

第14回

Fukuoka Tenjin

福岡天神キャンパスレポート

第四回 蓮翔祭開催！ 「縁～無限大∞～」

一〇月一三日（土）、「蓮翔祭」が開催された。テーマは「縁～無限大∞～」。様々な縁が大きな一つの円となり、無限大の強い絆を成していくようにとの願いが込められている。

開学四年目の福岡看護学部は、初めて全学年揃っての蓮翔祭となった。

講堂のステージ企画では、バンド演奏や歌、ダンスなどのパフォーマンスが繰り広げられ、観客を魅了した。恒例のミスコン・女装・男装コンテストでは、本番前から楽屋で入念な準備が行われ、会場を華やかに彩った。各サークルによる屋台は、ホットケーキアイスやチヂミ、やきとり、おしるこなど、工夫を凝らしたメニューが並び、訪れた方を楽しませた。

●バレーサークルのホットドック屋さん

●会場が熱気に包まれたバンド演奏

看護学科教員による企画コーナーでは、血圧測定や体組成測定、健康相談などを多くの方に体験いただいた。優しく清らかな蓮の花のように、看護の道を翔け上がっていこうという願いが込められた「蓮翔祭」を、全て手作りで造り上げてきた第一期生（四年生）も、残り五か月で卒業を迎える。抜群のスタッフワークで、会場を切り盛りする様子やいきいきとした学生の顔を見ると、よき伝統は後輩へと着実に引き継がれていると感じる。

蓮翔祭　特別講演会開催！

福岡山王病院の小坂正明形成外科部長による特別講演会「これからのアンチエイジング～眼瞼下垂、しみ、しわの最新治療～」が行われ、大勢の方にご来場いただいた。

老化と病気のメカニズムや予防法、アンチエイジングについての正しい知識など、大変興味深い内容を分かりやすく解説していただき、聴講者からは「身近なテーマでとても参考になった。バランスの取れた食事を心掛けたい」といったコメントが寄せられた。

また、医療人としての考え方や取り組みについても説明いただき、医療を志す方や学生にとっても大変意義のある講演内容であった。

（九州地区広報室　山本麻紗子）

第28回

Okawa

大川キャンパスレポート

第八回 月華祭開催！

どんな壁をも乗り越え 今よりもっと飛躍を！

そんな願いを「Ｊａｎｐ：Ü」のテーマに込めて、一〇月六日（土）・七日（日）に、「月華祭」が開催された。

「訪れた人へ少しでも元気と笑顔を届けたい」と、実行委員一〇〇人が半年かけて準備。初日はゲストのトークライブをはじめ、吹奏楽の演奏、ダンス、恒例の「ミス?コン」といったステージイベントなどで盛り上がったほか、ＰＴ・ＯＴ・ＳＴの各体験コーナーでは地域の方々や高校生らを相手に、学生たちが自助具や検査、療法の説明や展示などを行う学科企画イベントが繰り広げられた。

●爽やか女子の吹奏楽

二日目には、大川市恒例「大川木工まつり」のパレードが、初めて本学のグラウンドから出発。金出英夫副学長、学生らが隊に参加、大川木工まつりの会場までをにこやかに行進。「月華祭」に華を添えるとともに、地域のまつりの成功に一役買った。

そのほか、中学生バンドによるライブ、のど自慢大会、「こっぷくグランプリ」などで盛り上がり、締め括りはいよいよ灯明。地球から光が飛び立つ様子をイメージしたデザインには、東日本大震災の復興への願いと学生たちが社会に向かって夢を実現させていこうという思いがあふれ、見る人に静かな感動を与えた。

●月華祭フィナーレの灯明

特別講演会も同時開催！

「月華祭」では、特別講演会も同時開催。六日には、来年四月の医学検査学科新設に関連して、高木病院の渡辺恵子臨床検査部長による「臨床検査でここまで分かる!!　～がんの早期発見・早期治療のために～」や、福岡山王病院の副島修整形外科部長による「手や肘で健康をチェック」。七日には、心臓血管外科医で高木病院循環器センタースーパーバイザーでもある渡邊剛氏による「心臓を診る　～心臓手術の現状と未来、大川での一年を振り返って～」が開催され、大川市内外から訪れたたくさんの人が熱心に耳を傾けた。

（九州地区広報室　帆足リエ）

第6回

Shioya

塩谷看護専門学校キャンパスレポート

自治会主催の活動を紹介

スポーツ大会

九月二八日（金）に、大田原キャンパス内の那須アスリーナにおいて、「スポーツ大会」が開催された。全学年と教職員が参加し、バレーボール・バスケットボール・バドミントン・卓球をトーナメント方式で行い、学年対抗で点数を競った。今年は「大縄跳び」が追加され、大会の最後に大きな盛り上がりを見せクラスの団結力を向上させていた。

また、学年ごとにクラスTシャツを作って着用することが通例となっている。今年から初参加の七回生（一年生）も真新しい黒いTシャツで頑張っていた。今年は、教職員チームもTシャツを作って臨んだ。教職員の団結と学生たちを鼓舞するために、背中に書かれた文字は

願いは一つ

「全員合格！」

である。これは、三年生には国家試験に、一・二年生にはそれぞれの実習に合格してほしいという教職員の切なる願いがこめられている。どこまで学生に伝わったかは分からないものの、開会式で学生たちに披露したところ、三年生たちが教職員の背中に向かって両手を合わせていたのがなんとも印象的であった。

●教員もTシャツを新調

八汐祭

一〇月六日（土）、「八汐祭」が開催された。テーマは

見たい！　聞きたい！　知りたい！

『Ｍｙ Ｂｏｄｙ Ｙｏｕｒ Ｂｏｄｙ』。

昨年同様に学校祭実行委員を中心に、二年生がリーダーシップを発揮しつつ学生たちが一丸となって企画を進めた。当日までの紆余曲折は、学生たちにとっては一時的に苦しく感じるようだ。しかし、看護師を目指す看護学生として、グループでの協働やリーダーシップ・メンバーシップ、他グループや教員との交渉・連携などはどれをとっても必要不可欠なことである。そういったことも学びつつ、例年以上の来場者に大いに盛り上がりを見せた。

●この経験を学びに活かしてほしい

（教務部　川村理恵）

開原成允先生 記念シンポジウムの開催ご報告

国際医療福祉大学は、二〇一一年一月に逝去された開原成允・前国際医療福祉大学大学院院長の功績を称え、その遺志を継ぐシンポジウム（主催：国際医療福祉大学大学院、後援：日本医療情報学会、読売新聞東京本社）を九月二九日に東京都中央区で開催し、開原先生と親交のあった関係者ら約三〇〇名が参加した。

●開原先生の関係者を中心に300人の参加者が集まった

開原先生プロフィール

一九三七年東京都出身（享年七四歳）。東京大学医学部卒業。医学博士。東京大学名誉教授。フルブライト留学生として、Ｊｏｈｎｓ Ｈｏｐｋｉｎｓ Ｈｏｓｐｉｔａｌに留学、臨床と研究に従事。東京大学医学部教授、東京大学医学部附属病院・中央医療情報部長、世界保健機関（ＷＨＯ）研究協力センター長、東京大学附属図書館長などを歴任。国立大蔵病院長、㈶医療情報システム開発センター理事長などを経て、二〇〇一年に国際医療福祉大学副学長、二〇〇三年に同大学院院長に就任。日本医療情報学会長、国際医療情報学連盟（ＩＭＩＡ）会長、公益財団法人ドナルド・マクドナルド・ハウス・チャリティーズ・ジャパン理事長、第一八回日本医学会総会（二〇一二年）副会頭を歴任。世界保健機構（ＷＨＯ）から国際保健への貢献メダル、日本医師会最高優功賞など、受賞歴多数。死亡叙勲、瑞宝中綬章受賞、ヘルシー・ソサエティ賞受賞。

シンポジウムではまず、開原先生を偲ぶ映像が流された後、主催者として本学の高木邦格理事長が挨拶した。

初めて東京大学に開原先生を訪ね、かねてから疑問に思っていた「医療費四〇兆円の時代に、なぜ医療をマネジメントする学科が日本にないのか」についてお話を伺ったときのエピソードを披露。このときの訪問が、本学で日本初の医療経営管理学科を設立するきっかけとなったことに触れ、「開原先生の素晴らしいお人柄と幅広いご見識に接し、将来的にぜひ本学にお迎えしたいと感じました」と、当時の印象を述べた。

高木理事長はまた、開原先生は本学の大学院院長にご就任後、「生殖補助医療胚培養分野」、「医療福祉ジャーナリズム分野」などわが国初の大学院の分野を開設されたのを皮切りに、「ナースプラクティショナー養成分野」、「医療経営戦略コース（ｈ・ＭＢＡ）」などを次々に開設されるなど、本学の発展に寄与された多くの功績を称え、「開原先生は、国際医療福祉大学グループの諸葛孔明のような方。『困った時の開原頼み』で何かとご相談させていただいていましたが、亡くなられて一年八か月経ち、改めて先生の偉大さを感じています」と悲しみを新たにした。

●医療の国際化の重要性について語る藤本康二参事官

●開原先生との思い出を交えて語る大江和彦教授

続いて、本学の水巻中正大学院教授が総合司会を務めるなか行われた第一部の「基調講演」では、開原先生にゆかりのある大江和彦・東京大学大学院医学系研究科 医療情報経済学分野教授と藤本康二・内閣官房 医療イノベーション推進室参事官が登壇。それぞれ「医療のＩＴ化がもたらす社会貢献 ～展望と課題～」、「日本の医療イノベーションの今後の展望と課題」をテーマに、開原先生との思い出を交えながら講演した。

第二部の「パネルディスカッション」では本学の金澤一郎・大学院院長が座長を務め、「日本の情報化と国際交流 ～日本の取組みと課題～」をテーマに福井次矢・聖路加国際病院病院長、山田紀子・ピー・ジェイ・エル株式会社代表、小松研一・日本画像医療システム工業会会長・本学常務理事、本学の矢崎義雄総長がパネリストとして登壇。「医療の情報化」、「医療の国際化」、「リーダーとしての人材育成」の各テーマについて議論を交わした。

●パネルディスカッションでは会場からも質問を集めた

満席となった会場の横には、開原先生の足跡を紹介したパネルや叙勲の賞状、記念品、新聞掲載記事、ご家族とのプライベート写真など思い出の品々が展示され、訪れた来場者は開原先生がお元気でご活躍されていた頃の姿を懐かしんでいた。

（東京事務所　広報部）

同窓会「マロニエ会」 新代表幹事・副代表幹事決定

同窓会の新しい代表幹事・副代表幹事をご紹介いたします。

新代表幹事 上田清史（うえだ きよし）さん

理学療法学科一九九八年度卒
国際医療福祉大学病院
リハビリテーション室係長

「同窓会は会則第二条（目的）に則って、今後も広く活動を展開していきます。会員の皆さまには引き続きご協力の程をよろしくお願いいたします」

新副代表幹事 平野景子（ひらの けいこ）さん

言語聴覚学科二〇〇三年度卒
国際医療福祉大学クリニック
言語聴覚センター副主任

「同窓会が盛り上がるように頑張りますのでよろしくお願いいたします」

※会則第二条　本会は、会員相互の親睦を図ると共に医療福祉の向上に努め、母校の発展充実に寄与することを目的とする。

新副代表幹事 沼尾嘉人（ぬまお よしひと）さん

医療経営管理学科二〇〇〇年度卒
介護老人保健施設白楽園園長

「学部学科の枠を超えた交流を目指していきます。『一人一人の繋がり・絆』を大切にしていきましょう！」

お仕事でも責任ある立場でご活躍され、お忙しい身でありながら、大役を引き受けてくださった三名の方々に心より感謝いたします。明るく親しみやすい役員の方々の下で、引き続き同窓会活動を盛り上げて参りますので、今後ともよろしくお願い申し上げます。（同窓会事務局）

岩尾總一郎・前副学長が（社）日本尊厳死協会の六代目理事長に就任

本学の前副学長（現客員教授）・岩尾總一郎先生が理事長を務める（社）日本尊厳死協会による法制化の集いが一一月一〇日に開催された。当協会は一二万五千人の会員を擁し、一九七六年の創設以来、健やかに生き安らかに死ぬ権利を求める「尊厳死の宣言書」（リビング・ウィル）の普及と、携わる医師の免責を保障した尊厳死の法制化推進活動を展開している。前理事長・井形昭弘先生（名古屋学芸大学学長）の後を引き継ぎ、六代目理事長に就任された岩尾先生は、協会最大の課題である尊厳死の法制化に向け一層邁進していきたいとご挨拶された。尊厳死法制化を考える議員連盟の会長・民主党の増子輝彦議員や、自民党の中川雅治議員をはじめ、厚労省の原徳寿・医政局長が参加されるなか、本学の高木邦格理事長は、これまでの岩尾先生のご活躍を紹介するとともに、国際医療福祉大学熱海病院の寺岡慧病院長が、日本移植学会理事長（当時）として改正臓器移植法の施行を実現させたことにも言及し、当協会の一層の活動推進を祈念しつつご挨拶をした。（東京事務所　広報部）

第25回 教育研究大会・教員研修会 盛会に終わる

本学の高木邦格理事長が理事長を務める一般社団法人全国リハビリテーション学校協会は、八月二二日から二四日、「第二五回教育研究大会・教員研修会」をグループ校である福岡国際医療福祉学院にて行った。

「リハビリテーション教育の潮流と展望　～二五年の軌跡と新たな一歩～」と題し、講演やシンポジウムなど様々な内容が企画されたほか、今回からワークショップも同時開催（二一日・二二日に実施）となり、大会には全国からこれまで最多の四四八名が参加した。

今回は二五回目という節目の大会であり、加えて、日本リハビリテーション学校協会、全国理学療法士・作業療法士学校連絡協議会、日本言語聴覚士養成校教員連絡協議会の三団体が統合し「全国リハビリテーション学校協会」としてスタートした記念の大会となった。それに伴い口述発表とポスター発表を合わせて一〇七題という、これまでにない多くの研究発表が行われた。

また、二二日には、一般社団法人医療介護福祉政策研究フォーラム理事長であり国際医療福祉大学大学院の中村秀一教授による「これからの医療福祉の動向とリハビリテーション」をテーマにした特別講演、続いて「リハビリテーション教育の潮流と展望」をテーマに、高木邦格理事長をはじめ、藤田保健衛生大学才藤栄一副学長ら五名のシンポジストによるシンポジウムが行われた。リハビリテーション医療と教育の第一人者による情熱溢れるメッセージに、聴講者も教育への想いを新たにした。最終日には九州大学丸野俊一理事・副学長の特別講演「メタ認知能力を育むには」が行われ、講演後には、聴講者との質疑応答が活発に行われた。

（九州地区広報室　原田ちはる）

新宿けやき園

新宿区長が「一〇〇歳以上の入所者のお祝いの会」を訪問

九月九日、敬老の日を迎えるにあたり、東京都新宿区の中山弘子区長が新宿けやき園を訪問された。当園「けやき広場」で開催された「一〇〇歳以上の入所者のお祝いの会」に参列され、一〇〇歳以上の入所者五名とそのご家族に対し、「今後なお一層のご長寿を」とお祝いの言葉をかけられた。

その後、区長は一人ひとりに丁寧に声をかけながらお祝いの品を渡し、写真撮影にも応じてくださった。

入所者とそのご家族はともに、中山区長に直接お祝いをしていただいたことを大変喜んでいらっしゃった。

（新宿けやき園　田中哲也）

北島政樹学長が合同国際会議で講演

九月一二日・一三日の両日、OECD（経済開発協力機構）、APEC（アジア太平洋経済協力）、早稲田大学が共催で『超高齢社会と情報社会の融合』をテーマに、「21世紀最大課題　超高齢社会と情報社会の融合」をテーマに講演した。

そうそうたる顔ぶれのなか北島学長は、「高齢社会のICTイノベーション」をテーマに高齢者に対する低侵襲・個別化治療について講演。慶應義塾大学病院長・学部長時代に医学部と理工学部でタッグを組み、日本初の遠隔ロボット手術を行ったエピソードなどを例に引き、今後、産官学共同で研究開発を行っていく重要性を伝えた。世界中が超高齢社会への対応を模索するなか、北島学長がこうした国際的会議で講演されたことにより、日本初の医療福祉の総合大学として本学の果たす社会的責任と存在感は、さらに増すことになる。

（東京事務所　広報部）

●各国要人を前に講演する北島学長

視機能療法学科

第二二回国際視能矯正学会 in トロント

この学会は国際視能訓練士協会が四年に一度開催し、各国の視能訓練士や眼科医が最新の研究成果を発表する。今回は六月二六日～二九日にカナダのトロントで開催された。四四ヶ国・四六九名が参加し、学術展示一二三題、口演五六題が発表された。内容は充実したものが多く、各国参加者の視点から活発な質疑が交わされた。教育講演やシンポジウムも数多く組まれ、海外のトピックスや最新動向をいち早く知ることができた。

日本からは七演題が発表され、本学からは新井田孝裕学科長を筆頭に小町祐子、四之宮佑馬、鈴木賢治の四名が発表した。英語での説明に冷や汗をかきながらも、無事に終えることができた。海外の視能訓練士と学術的な意見交換をするのは初めてであったが、視点を広げる貴重な体験となった。ペーパーレス化が図られ、TransactionもUSB内蔵のリストバンドで配布され、時代の流れを感じた。次回はアムステルダムで開催される。

（視機能療法学科講師　小町祐子・助教　四之宮佑馬）

大学院　福祉援助工学分野

大田原で合宿・発表会

大学院福祉援助工学分野は九月二二・二三日、大田原で発表会を行った。毎年恒例の合宿で、福祉援助工学領域、福祉用具管理指導者領域の四五名と、教員は山本澄子分野責任者、田中繁特任教授、勝平純司講師、東畠が参加した。

日程は初日が一〇時～一八時、二日目は九時～一八時で、修士一年から順に研究テーマ、方法、進捗などが報告され、その都度、厳しい指摘が相次いだ。院生が互いに質問しあうのが特徴で、歩行分析などの人間工学、福祉用具選定に係わる人材養成等、専門の違い、領域を超えて、「研究の妥当性は」「何に役立つのか」などを尋ねる姿が見られた。修士一年には初めてのプレゼンテーションの場であり、わかりやすい説明を考える機会にもなった。遠方の院生の中には前日から大田原に宿泊して備えたものもいる。小雨が降る肌寒い天候の中、寒さを吹き飛ばすパワーであった。

なお、本分野は一一月一七日に博士課程一年・二年の報告会、二月二三日にこれも恒例の修士・博士学位取得者による報告会と慰労会を開催する。

（福祉援助工学分野准教授　東畠弘子）

「リレー・フォー・ライフ とちぎ 2012 in 宇都宮」に参加

リレー形式でほぼ二四時間歩き続ける「リレーウォーク」を通して、がんと闘う方々の勇気を称え、地域一丸となってがんに対する理解の拡大と、がんと闘う意識を育てようというチャリティイベント「リレー・フォー・ライフ とちぎ 2012 in 宇都宮」が、九月一五・一六日に宇都宮市の宇都宮城址公園で開催された。

栃木県での開催は初めて。本学は教職員二二名、学生五五名による「教職員・学生ボランティア連合チーム」を結成し、「共に生きる社会をめざして」と書いた横断幕を手に、二四時間歩き続けた。

イベントにはがんの患者さんや家族も参加。講演や啓発ブースも設けられ、医療福祉の専門職をめざす本学の学生にとって、〝がん〟という病気を改めて考え、身近に感じる機会となった。

（ボランティアセンター　中里愛）

●交代で歩き続けた24時間

看護学科

平成二四年度 W.in-W.in-W.in

「Win-Win-Win」とは、学生と臨床指導者、教員の顔なじみ関係をつくり、学生の実習に対する不安や緊張を和らげることを目的としている。今年度は七月七日に、新たに塩谷病院の臨床指導者も加わり、国際医療福祉大学病院を含め一四名の臨床指導者と学生六三名、教員一二名で行われた。内容は、ロールプレイングを体験し日常的な看護場面の理解を図ることと、フィジカルアセスメントシミュレータを用いてアセスメントを学びながら実習に対する不安を直接指導者に相談することである。

学生からは、「臨床指導者を身近な存在と感じられた」「楽しかったが気が引き締まった」等の感想が数多く聞かれ、指導者からは、「学生の本音が聞ける良い機会となった」との反応があった。

（看護学科助手　佐藤信子）

医療福祉・マネジメント学科

シンポジウム

「多職種連携の質的向上の可能性について」の開催

九月二日、本学科では、大学同窓会「マロニエ会」と共催し、『多職種連携の質的向上の可能性について』と題するシンポジウムを大田原キャンパスで開催した。

専門職間での「連携」が求められる中、医療、介護現場での課題とその改善策について議論がなされた。シンポジストには、病院現場を知る大西正利准教授、ケアマネージャーとして林和美准教授、関連職種教育を指導される加藤尚子准教授が登壇し、退院調整を事例に属人的なシステムの現状が指摘された。

会場の前野一雄教授からは「改めて患者中心のケア提供体制を！」との指摘があり、円滑な連携を実現するためには、現在検討されている地域責任者の配置よりも「地域単位でのケア情報の共有」が重要であるとの結論となった。七〇名という多くの方が出席され、この問題への関心の高さを表していた。

（医療福祉・マネジメント学科講師　今野広紀）

「経営系三年次実習報告会」「第一六回医療経営戦略セミナー」

九月二九日、本学科主催による「経営系三年次実習報告会」と「第一六回医療経営戦略セミナー」が大田原キャンパスで開催された。

「経営系三年次実習報告会」は四週間の夏季実習の成果を実習病院の指導者へフィードバックするとともに、二年生への情報提供を目的として毎年秋に実施している。約一六〇名が参加した今年は、実習生が三六施設ごとに一五分の口演発表を行い、座長や熱心にメモを取りながら聞き入る二年生と質疑応答を行った。

「第一六回医療経営戦略セミナー」は西澤延宏佐久総合病院副院長による『DPC病院における医療マネジメント』と題した講演があり、栃木、茨城、福島をはじめ、熊本や東京の医療福祉施設から八七名、大学関係者・学生を合わせると約二〇〇名が参加した。佐久総合病院がDPC導入を契機に取り組んだ診療情報管理体制の強化や医療の標準化の推進について解説。診療情報管理士や医師事務作業補助者をチーム医療に組み込むことが成果を上げるうえで必要であると訴えた。

（医療福祉・マネジメント学科講師　中田健吾）

臨床医学研究センター（東京地区）

山王病院

新しく着任された 加藤達夫教授のご紹介

九月一日より、国立成育医療センター前理事長・総長、現・名誉総長の加藤達夫先生が着任されました。国立成育医療センターは、平成一四年三月に国立大蔵病院と国立小児病院が統合したナショナルセンターです。当グループの山王病院小児科に、大学院教授として着任された加藤先生のご挨拶をご紹介します。

●加藤達夫教授

着任にあたり、栃木地区の本学のすべての施設を見学する機会をいただきました。まさに「医療と福祉、介護はシームレス」を実践していると感じるとともに、現在わが国で課題となっている「チーム医療」、「地域医療」が既に確立していることも同時に感じ入りました。

大学院へ入学される方々は、多方面で現場経験を積んだリーダーが多いと伺っております。こうした方々が本学で研鑽される環境は充分に整っていると考えます。単に論文をまとめるのではなく、臨床と学問を同時に深め、卒業後は是非、その研鑽を臨床面で活かしていただきたいと願っており、私も微力ながら努力してまいります。どうぞよろしくお願いいたします。

附属病院

国際医療福祉大学塩谷病院

集団救急事故救助救護訓練に参加

九月五日、塩谷広域行政組合消防本部主催による「集団救急事故救助救護訓練」が、栃木県消防防災航空隊、栃木県ドクターヘリ、塩谷郡市医師会、矢板警察署、矢板市消防団、塩谷広域災害応援協議会、当院など一〇団体の協力により行われた。

県道三〇号を走行中のトラックが蛇行運転し歩行者や乗用車と衝突、多数の負傷者が出たという想定で、ドクターヘリ、災害ヘリ、クレーン車等も使う大規模な訓練。当院からは一瀬雅典副院長と看護師の笹沼主任が現場でトリアージを行った。

その後、負傷者を救急車で当院に搬送して終了の予定だったが、より実効性のある訓練にするため、搬送された負傷者に対し救急外来にて深澤公朗外科部長と看護師二名がトリアージを実施。これまで実際にこうしたケースはなく、トリアージタグを使った訓練は有意義だった。今後、実際の事故や災害にも的確に対応ができるよう意識づけを図っていく。

（総務人事課）

●負傷者役の人にトリアージを行う一瀬副院長

附属病院

国際医療福祉大学病院

県北地域悲願の 循環器センター開設を記念し、『循環器セミナー』を開催

当院は九月一二日に、栃木県北部地域における長年の悲願である心臓外科手術を行う「循環器センター」を設立した。

これまで、当地域には心臓の開心術に対応する病院がなく、患者様は宇都宮市以南まで行く（もしくは搬送される）必要があった。当センター開設の目的は、循環器疾患の患者様のこの地で完結した治療を可能にすることだ。

当センターは、循環器内科医四名、心臓外科医三名、血管外科医三名の常勤医一〇名で構成され、最新高度医療機器と看護師やメディカルスタッフとのチーム医療を通じて、高度で専門的な医療を二四時間体制でご提供する。患者様にやさしく、わかりやすい医療を心がけ、急性心筋梗塞、狭心症、心筋症、心臓弁膜症、血管疾患など、広く循環器疾患について対応していく。

当センター開設を記念して、一〇月二八日に院内の講堂において『循環器セミナー』を開催したところ、小雨降る生憎の悪天候にもかかわらず、定員三〇〇名に対し三七〇名が来場した。

●多くの来場者で会場は熱気に包まれた

蘇原泰則病院長による主催者挨拶に始まり、特別講演、三題の講演、シンポジウムが行われ、来場者は最後まで熱心に聞き入った。

特別講演「長寿のための心血管病の知識」では、東北大学循環器内科の下川宏明教授から「患者様に負担のかからない治療をめざしている」と当院の説明があった。また、那須郡市医師会の江部寛会長からは「センター設立は、県北地域の医療レベルの向上につながる」とのお言葉を頂戴した。自治医科大学心臓血管外科部門の川人宏次教授は、「心臓手術が可能な施設へのアクセスが肝心」と強調された。

三題目の講演では、当院循環器センター長の柴信行教授から、当センターの概要説明と「患者にやさしく、安心できる医療の提供に努めたい」との意思表明がなされた。

シンポジウムでは、来場者から次々と質問が寄せられ、「循環器センター」設立に寄せる期待と関心の高さが窺われた。

（総務企画課）

●循環器センター柴信行センター長

附属病院

国際医療福祉大学三田病院

長村義之教授 Paul Nakane Prizeを受賞

病理診断センターの長村義之教授が、八月二六日～二九日の第一四回国際組織細胞化学会議において、永年の組織化学における功績と国際的な指導力が評価され、Paul Nakane Prizeを受賞された。

●京都にて受賞時の写真
左：長村義之教授、右：Paul Nakane教授

Paul Nakane（中根一穂）教授は酵素抗体法の創始者であり、米国における研究活動で大いに業績をあげ、国際的なレベルでの組織化学の発展に貢献され、指導的役割を果たしてきた。

Paul Nakane Prizeは二〇〇四年の第一二回国際組織細胞化学会議で設定され、今回が三回目の授与となる。

長村教授は一九七〇年慶應義塾大学医学部卒業と同時に渡米され、コロラド大学医学部メディカルセンターにてPaul Nakane教授の指導を受け、酵素抗体法を習得し、帰国後も下垂体腫瘍の研究および病理診断において多くの業績を残している。また、二〇〇八年からは、国際組織細胞化学会連合（IFSHC）の理事長として、組織化学の国際的な発展に努めている。

今回の受賞を受け長村教授は、「中根教授から直接指導を受けて以来、早くも四〇年以上経過したが、今回指導者の名前を冠したPaul Nakane Prizeを受賞し無上の喜びと感じている」と述べている。

（総務企画課）

脊柱側弯症外来開設のお知らせ

九月一五日、脊椎脊髄センターでは、専門外来の脊柱側弯症外来を開設した。

脊柱側弯症は背骨が曲がる病気で、通常は小児期に発症するが、病態や自然経過はさまざま。治療法は、病態や側弯の進行度に応じて、経過観察したり、装具療法あるいは手術療法を行う。他の脊椎脊髄疾患と比較して、診断および治療には専門的な知識や技術、経験が必要だ。

当外来では、脊柱側弯症をはじめさまざまな脊柱変形に対し、多くの治療経験を持つ同センター副センター長の石川雅之准教授が診療を担当し、主に思春期の脊柱側弯症と成人期の脊柱変形に対する治療を行う。

●脊柱側弯症外来を担当する石川雅之准教授

（総務課）

附属病院

国際医療福祉大学熱海病院

回復期リハビリテーション センター開設

八階の病棟を改修し、七月より回復期リハビリテーションセンター（病床数三一床）を開設した。

改修工事を終え、七月から患者様の受け入れを開始。八月からは「回復期リハビリテーションセンター」として、医師、理学療法士、作業療法士、看護師、介護福祉士、社会福祉士らが緊密な連携のもと社会復帰、在宅生活復帰の支援に努めている。当院では人工透析を受けつつリハビリテーションができるのが大きな特長である。病室は四人部屋七室と個室三室で、すべての病室と病棟ラウンジから相模灘が一望でき、心身ともに癒される空間となっている。

センター開設により、急性期から回復期まで、継続して切れ間のない治療と集中的なリハビリテーションを提供し、患者様の一日も早い社会復帰を支援していく体制を整えることができた。これまで同様、患者様へ質の高い医療・リハビリテーションを提供することをめざしていく。

●車いすなどが通りやすいように病室はゆったりとした造り

（総務課）

臨床医学研究センター（千葉地区）

化学療法研究所附属病院

小中副院長がACCP学会長を務める

一〇月六日、第一〇四回ACCP（アメリカ胸部医学会）日本部会定期教育講演会が山王病院で開催され、学会長を当院の小中千守副院長が務めた。

ACCP日本部会は、American College of Chest Physiciansの日本での活動を担って一九六九年に設立された専門医の団体である。日本の指導的な胸部疾患専門医（呼吸器内科、呼吸器外科、循環器内科、心臓血管外科）が中心となり、内科、外科といった分野にとらわれることなく、胸部疾患を主とした診断、治療法を探索し、情報発信の基点となって医療技術の発展に努めている。

今回は三人の部会賞受賞者の講演と、呼吸器外科・内科、循環器内科、心臓血管外科の学術講演が一題ずつ、さらに特別講演が一題行われた。終了後、山王メディカルセンターのレストラン・オーブにて懇親会が開かれ、金澤一郎本学大学院院長にご挨拶をいただき、盛会のうちに終了した。

（総務人事課）

IUHW 卒業生・留学生通信 2012.11

利用していることを自慢したくなる施設にしたい

二〇〇一年三月、医療福祉学科の第一期生として卒業後、障害者支援施設（栃木県芳賀郡益子町）で施設長として活躍している菊地月香さんにインタビューしました。

■社会福祉法人同愛会　障害者支援施設光輝舎　施設長　菊地月香（栃木県立大田原女子高校出身）

●この世界を志したきっかけは？

小学生時代に父親が勤務していた障害者施設へ行事の際、ボランティア等で行っていたので、こういう仕事があることを自然に知りました。父がこの仕事に誇りを持ち、決して愚痴を言わないことも、私をこの仕事に向かわせた大きな理由でした。

●大学に入って感じたことは？

入学する前は、「福祉＝障害者のお世話」くらいの認識でしたが、実際には、これを取り巻く医療・法律・制度などの大きな仕組みがあること、また、さまざまな対象者がいることなどを知って、**福祉を考える視点が一気に広がりました。**二〇〇〇年から介護保険が施行されたこともタイミング的にはぴったりでした。さらに、人としてのマナー、社会に出るときのマナーを教えていただいたことも自分を変えるきっかけになりました。

●本学で学んで良かったことは？

私が働いている現場では、福祉だけでなく、医療やリハビリ、さらにはターミナルケアなどが切り離せません。また、私自身は施設の経営をあずかっています。**この大学はそうしたさまざまな職種の先生や友だちとの交流があるので、それが大きな財産となり仕事に活かされている**ことを卒業してから実感しています。

●写真撮影も利用者といっしょに

●これからの夢は？

六年前に他の大学の大学院で学びました。テーマは「地域福祉推進主体としての社会福祉法人の位置と役割」。ここでも国際医療福祉大学の多くの先生方と接点がありました。今考えているのは、世の中の流れに合わせて事業を守ること。拡大や展開よりも、**利用者や職員の満足に視線を合わせていきたい**と思っています。

●最後に

光輝舎では、利用者とそのご家族、職員で海外旅行などを定期的に実施しています。なんと言っても利用者の楽しそうな表情が見られるのが最大の喜びですが、一方、職員は車椅子利用者の飛行機の乗り方をそこで初めて知るなど、仕事に役立つ新たな発見につながっています。

光輝舎（施設入所支援五〇名、生活介護五〇名、短期入所六名）
デイセンターこうき（生活介護二〇名）

留学生紹介コーナー

去る六月三日（日）、大田原ロータリークラブ主催の善勝川清掃ボランティアに本学留学生が参加しました。学外における活動への参加を通し、地域の方々とも交流を行っています。今号は、薬学部の新入生二名を紹介します。

●清掃ボランティアに参加した留学生

チョウ・コウさん（中国）
薬学部・薬学科一年

上海の出身です。観光地だけじゃない、普段着の上海を知りたい方は、ぜひ私に声をかけてください。地元の人間ならではのお勧めポイントをたくさん知っています。上海といえば小龍包が有名ですが、観光客向けじゃなくてもおいしいお店はたくさんあります。例えば、私の実家のすぐ近くの屋台では、とてもおいしい小龍包が二元（日本円で約五〇円！）で食べられます。その他上海の穴場をお教えします！

私の座右の銘は「任何一次対自己的原諒都会導致下次更大的錯誤（自分の犯したミスを見逃すと、次はもっと大きなミスを引き起こす）」です。自分を律して楽しい留学生活を送ろうと思います。

ノ・テヒョンさん（韓国）
薬学部・薬学科一年

全羅北道（チョルラプクド）群山（グンサン）市の出身です。韓国といえば、ソウルや釜山などの大都市が有名ですが、地方にも面白い街がたくさんあります。私の故郷群山は、韓国の穀倉地帯に位置し食べ物がおいしいことで有名です。食文化に興味をお持ちの方は、地方へも足を延ばしてみてはいかがでしょうか。

留学生活は楽しいことばかりではありません。でも、私は「피할수 없다면 즐겨라！（避けられないのなら楽しめ）」という精神で毎日を有意義に過ごしていこうと思います。卒業後は、帰国し薬学に関わる仕事に携わり、韓国の医療福祉の発展に役立つ人材になりたいと思っています。

●ノ・テヒョンさん（左）とチョウ・コウさん（右）

IUHW Graduate School Information

国際医療福祉大学大学院

2013年度 入学生募集中
学内推薦入試制度あり

医療福祉専門職として活躍中の卒業生のみなさん、
大学院でさらなるレベルアップをめざしませんか（本学卒業生は入学金が免除になります）

「働きながら大学院で学びたい」社会人が学びやすい3つの特長

①キャンパス　大田原、東京青山、小田原、熱海、福岡、大川に6つのキャンパスを開設しています。

②カリキュラム　多くの授業を平日の夕方以降と土曜日の昼間に行なっています。

③同時双方向遠隔授業　複数のキャンパスで授業をリアルタイムで受講できます。質問やディスカッションといった同時双方向のコミュニケーションも可能です。

TOPICS 文部科学省の「がんプロフェッショナル養成基盤推進プラン」に基づく新コースを平成25年4月開講

文部科学省が平成24年度から実施している「がんプロフェッショナル養成基盤推進プラン」に慶應義塾大学を中心に本学を含めた10大学が参画する「高度がん医療開発を先導する専門家の養成プログラム」が採択されました。
本学の「がん先端医療に対する多職種連携重点コース」（博士課程、平成25年4月開講）では、異なる専門領域の学生が共にがん先端医療の実際を学び、それぞれの専門分野での治療計画の策定を協同して行うことができる専門医療職の養成をめざします。
ご関心のある方は、ＨＰをご覧ください。**http://www.iuhw.ac.jp/daigakuin/ganpro/index.html**

大学院入試に関するお問い合せは入試事務室まで（TEL：0287-24-3200）

学べる！役立つ！究める！動画サイト。医療・福祉・介護のエキスパートのあなたへ

医療福祉eチャンネル http://www.ch774.com 好評配信中

主な配信番組

●リハビリテーション共通分野
考える高次脳機能障害、
リハビリにおけるリスクとその対策
●理学療法分野
第46回日本理学療法士協会全国学術研修大会（山梨）
●作業療法分野
2011作業療法フォーラム、作業療法士現職者共通研修
●言語聴覚分野
摂食・嚥下リハビリテーションの実際
●介護・福祉分野
役に立つ福祉用具の今日・明日・未来、自立支援ケアマネジメント・自立支援介護
●医療・福祉・経営実務
平成24年診療報酬・介護報酬ダブル改定対応のポイント

●自立支援ケアマネジメント・自立支援介護

●ケアマネジャー受験講座

●東京こども医学教室（IUHWヘッドライン）

●受験講座
ケアマネジャー受験講座
※第15回試験問題速報解説（11月中旬配信予定）
●大学紹介
大学・学科紹介、マロニエアワー、IUHWヘッドライン

お問い合わせは　フリーダイヤル　0120-870-774　医療福祉eチャンネル お客さま係（月曜～金曜 9:00～17:00）
Eメール　info@iryoufukushi.com　〒107-0062 東京都港区南青山1-3-3 青山一丁目タワー4階

学生向け動画配信サイト OPEN!　「国際医療福祉大学VODライブラリー」http://www.ch774.com/student.php

主な配信番組
●大学授業・副教材
心理学、教育学、ボランティア論、生命倫理、医学・医療史、トップクラス講義、関連職種連携論、PT動作分析論、生理光学、公衆衛生看護活動、産業看護の基礎、視能訓練学Ⅰ、等

広報誌 IUHW 91 号

発行：学校法人 国際医療福祉大学

〔大田原キャンパス〕広報委員会
栃木県大田原市北金丸2600-1　☎0287-24-3000
〔小田原キャンパス〕
神奈川県小田原市城山1-2-25　☎0465-21-6500
〔福岡天神キャンパス〕
福岡県福岡市中央区長浜1-3-1　☎092-739-4321
〔大川キャンパス〕
福岡県大川市榎津137-1　☎0944-89-2000
編集：大田原キャンパス広報室　☎0287-24-3210
デザイン：野佐デザイン

医療福祉の多彩なエキスパートを育てる。
国際医療福祉大学
http://www.iuhw.ac.jp/

ⓒ国際医療福祉大学2012　Printed in Japan　禁無断転載・複写

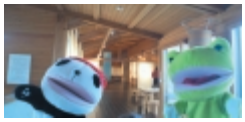
学生投稿ページ
11

眠ったアート心を呼び覚ませ！私のいち押しアートスポット

今年の秋の収穫は？といっても芸術の話。
大田原周辺にはいろいろな芸術･文化スポットが点在しています。
その中から、みなさんにおすすめしたいスポットを紹介してもらいます。

もうひとつの美術館・いわむらかずお絵本の丘美術館

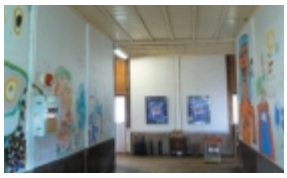
言語聴覚学科
パンダ君とカエル君（匿名）



今回パンダ君とカエル君は芸術堪能特別捜査官として、田舎情緒溢れる那珂川町の美術館をレポートしました。（芸術は爆発だぁ：カエル）

★★

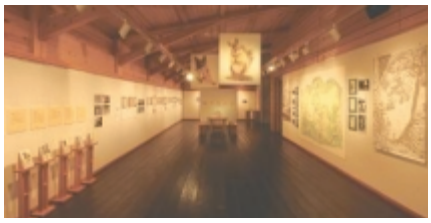
「**もうひとつの美術館**」は明治時代の面影を残した小学校の校舎を再利用した美術館で、訪れるだけでどこか懐かしい感じがします。



この美術館は、ハンディキャップを持つ人たちの造形作品を中心にオルタナティブ（非主流的）なアートを展示しています。どの作品にも、対象物に対する独特の感性が溢れており、人や花といった普段よく目にするものでも、こうした見方があるのかと驚かされます。（芸術って心で感じるものなんだ：パンダ）

★★

「**いわむらかずお絵本の丘美術館**」はかわいいネズミが登場する「14匹」シリーズなどで有名ないわむらかずおさんの描かれた絵本の原画が展示されている美術館です。童心に返り大切な何かを気付かせてくれます。御本人の絵本の読み聞かせもありますので、要チェックです。



もうひとつの美術館
那須郡那珂川町小口1181-2

いわむらかずお絵本の丘美術館
那須郡那珂川町小砂3097

那須ステンドグラス美術館

薬学科1年
青柳菜摘さん（左）
栃木県立真岡女子高校出身

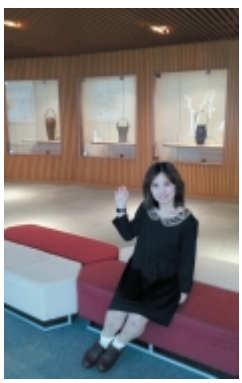
右は**秋山真理さん**
（薬学科1年）
神奈川県･立花学園高校出身

芸術の秋ということで、「**那須ステンドグラス美術館**」に行ってきました。昔のイギリスをモチーフにした建物で、館内はステンドグラスの温かな光やアロマの落ち着いた香りで満ち溢れています。毎時間演奏されるパイプオルガンの生演奏はとても感動的です。時間を忘れてしまうような、癒しのひと時を味わうことができました。実際に住んでみたいくらい素敵な美術館です。みなさん是非訪れてみてください！

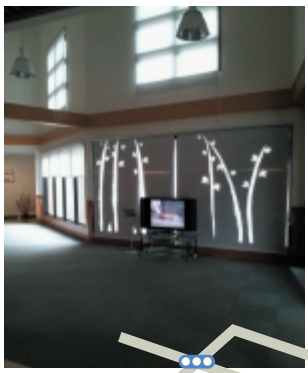
那須ステンドグラス美術館
那須郡那須町高久丙1790

竹のギャラリー

放射線･情報科学科1年
塚田絵里子さん
栃木県立栃木女子高校出身



大田原市は、竹工芸で有名なのはご存知でしょうか？ 今回、その竹工芸が展示されている道の駅那須与一の郷にある「**竹のギャラリー**」を紹介します。ここには、人間国宝の勝城蒼鳳氏や故八木澤啓造氏など著名竹芸作家の作品が展示されています。実際に作品を見てみると、「これが竹で作れるの？」と思うような作品が展示されていて驚きました。また、落ち着いた雰囲気で、窓には竹をイメージした影があるなど内装にも工夫が見られます。みなさんも一度訪れてみてはいかがでしょうか。



竹のギャラリー
大田原市南金丸1584-6